

北海道釧路市幣舞遺跡から出土した銭貨の調査と分析

Research and chemical analysis of coins excavated from Nusamai Site in Kushiro City, Hokkaido

石川 朗^{*1}・中村 和之^{*2}・三宅 俊彦^{*3}

Akira ISHIKAWA^{*1} Kazuyuki NAKAMURA^{*2} Toshihio MIYAKE^{*3}

Summary

The five batches of coins were found at archaeological sites in Hokkaido. They are called as Shinori batch in Hakodate City, Suzakidate batch in Kaminokuni Town, Wakimoto batch in Shiriuchi Town, Kabari batch in Hidaka Town and Kotanhama batch in Rumoi City. But there is no discovery of batch of coins in the eastern part of Hokkaido. 45 Chinese coins were found from the grave of Ainu at Nusamai sites in Kushiro City. Kushiro City is located in the eastern part of Hokkaido. These coins belong to the date from Tang to early Ming, and the latest coin is the 永樂通寶 *Yongle Tongbao* (first minted in 1408) in Ming era.

はじめに

北海道からは5つの一括出土銭が発見されている。すなわち函館市の志海苔古銭、上ノ国町の洲崎館古銭、知内町の涌元古銭、日高町の賀張古銭と留萌市のコタン浜である。北海道の東部では、一括出土銭は見つかっていない。さきに筆者らは、釧路市幣舞遺跡から出土したガラス玉について報告した(石川ほか2014)。本稿では、それらのガラス玉と一緒に出土した銭貨について報告したい。それらの銭貨はすべて中国銭で、最新銭は永樂通寶(1408年初鑄)である。

幣舞遺跡のアイヌ墓

釧路市幣舞遺跡は、釧路川河口から約1 km上流の左岸段丘上に位置する。遺跡地は1885年の釧路郡役所設置以来、官庁街的な発展を遂げたことから土地改変が著しく、その度ごとに多量の遺物が露見している。また、貝塚や竪穴群が含まれていたことから日本先住民論争における調査地の一つとして着目され、1888年には坪井正五郎が郡役所裏で発掘調査を行っている(坪井1888、1893)。アイヌ文化期の遺構としてはチャシ跡が存在していたが、詳細は不明である。発掘及び工事立会調査は1989年以降において6次にわたり2,579 m²を対象に実施され、縄文早期前半から近世までの遺物702,948点が出土した。

1992年の第2次調査では本稿で対象とする43号を含む5基の墓(10・11・39・43・70号)が第Ⅲ層から発見された。これらの墓坑形態は隅丸長方形または小判形をなすもので、渡島駒ヶ岳起源のko-c2(降灰1694年)が被覆する(花岡1999)。埋葬体位は伸展葬で、頭位は39号が東のほかは南東である。

副葬品は3基にあり、内容は39号が小刀、吊耳鉄鍋(三脚・丸型湯口)、43号が小刀、内耳鉄鍋(三脚・丸型湯口)、漆器片、銭貨、ガラス玉、竹製管玉ほか、71号が刀、小刀、鏝などである。43号墓の銭貨及び首飾り以外の副葬品は小刀、漆器が墓坑内北西(被葬者の足先)から、鉄鍋は破片を除き足

側墓坑外の坑長軸より南西側にずれた位置から伏せた状態で発見された。人骨の保存状態は不良で発見部位は、頭蓋と下肢骨の一部であったため形質人類学的な所見は性別(女性?)と年齢(壮年)が推定されたに留まる(高山1999)。ただし出土状態から、これらの墓の被葬者は、アイヌに関わる人々とみて大過ないものと判断される。(石川 朗)

銭貨の特徴

43号墓からは合計54枚の銭貨が出土した。この内44枚は頭部から胸部にかけて滑車形木製品、竹製管玉、ガラス玉、紐の一部と共に出土しており、首飾り(タマサイ)の装飾として用いられたことが分かっている。残りの10枚は、遺体左側の板片上から出土している。それぞれの銭貨の出土位置を表1の備考欄に示しておく。

銭貨はすべて中国銭であった。最古銭は唐・開元通寶(621年初鑄)、最新銭は明・永樂通寶(1408年初鑄)である。銭貨の内訳は唐銭2枚、北宋銭31枚、金銭1枚、明銭20枚で、北宋銭と明銭が主体となっている。唐銭は開元通寶1枚、乾元重寶1枚であった。北宋銭は太平通寶1枚、至道元寶1枚、咸平元寶1枚、景德元寶3枚、祥符元寶2枚、天禧通寶2枚、天聖元寶4枚、景祐元寶1枚、皇宋通寶3枚、至和通寶1枚、嘉祐通寶1枚、熙寧元寶1枚、元豐通寶3枚、元祐通寶3枚、元符通寶2枚、大觀通寶1枚、政和通寶1枚である。金銭は正隆元寶1枚であった。明銭は洪武通寶3枚(1枚は背面右側に“一錢”)、永樂通寶17枚であった。

出土銭は鈴木公雄氏の集成した日本の一括出土銭の出現率(鈴木1999)と比較すると、一括出土銭に含まれる銭貨に多いもので構成されている。特に上位20位までに含まれるものが主体となっており特定の銭貨を選択するような傾向は見られない。しかし、永樂通寶が17枚と最も多く、全体の約30%を占めていることは注目される。永樂通寶の存在が銭貨の流入ルートを示唆していると考えられるからである。

*1 釧路市埋蔵文化財調査センター Kushiro City Archaeological Operations Center *2 函館工業高等専門学校 National Institute of Technology, Hakodate College *3 淑徳大学 Shukutoku University

No.	錢 銘	王朝	初鑄年	銅 Cu (%)	鉛 Pb (%)	錫 Sn (%)	直径 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	書体	備 考	報告 No.
1	開元通寶	唐	621	42.69	40.12	17.19	24.9	7.2	1.4	3.0	隸書	首飾り	115
2	貞元重寶	唐	758	40.96	33.89	25.15	24.0	6.7	1.1	2.8	隸書	首飾り	101
3	太平通寶	北宋	976	38.41	42.28	19.31	24.4	5.7	1.0	3.0	隸書	首飾り	104
4	至道元寶	北宋	995	55.78	27.39	16.84	24.4	5.6	1.2	3.2	草書	首飾り	79
5	咸平元寶	北宋	998	31.63	53.60	14.77	24.3	5.7	1.2	3.4	真書	首飾り	118
6	景德元寶	北宋	1004	36.64	40.49	22.87	24.5	5.4	1.2	2.4	真書	遺体左側、一部欠	67
7	景德元寶	北宋	1004	49.18	38.56	12.27	24.5	5.9	1.4	2.8	真書	首飾り	76
8	景德元寶	北宋	1004	47.55	31.68	20.77	24.6	5.7	1.4	3.6	真書	首飾り	110
9	祥符元寶	北宋	1009	34.17	47.84	17.99	24.9	5.1	1.0	3.1	真書	首飾り	92
10	祥符元寶	北宋	1009	37.22	49.71	13.08	23.6	6.6	0.9	2.1	真書	首飾り、円孔に加工	103
11	天禧通寶	北宋	1017	43.99	41.95	14.06	25.4	6.2	1.3	3.5	真書	首飾り	89
12	天禧通寶	北宋	1017	39.85	43.88	16.27	24.7	6.9	1.1	3.0	真書	首飾り、糸ずれにより円孔に変形	114
13	天聖元寶	北宋	1023	26.61	43.05	30.34	25.0	6.6	1.2	2.8	真書	遺体左側	73
14	天聖元寶	北宋	1023	42.35	37.31	20.35	24.9	7.0	0.9	2.9	篆書	首飾り	106
15	天聖元寶	北宋	1023	37.89	52.13	9.98	24.4	6.0	1.4	3.7	篆書	首飾り	113
一	天聖元寶	北宋	1023	41.42	39.59	18.99	24.8	7.4	1.0	1.8	篆書	首飾り、破損、取拓せず	88
16	景祐元寶	北宋	1034	41.83	44.28	13.90	25.5	6.3	1.2	3.6	真書	首飾り	94
17	皇宋通寶	北宋	1038	27.64	45.78	26.58	24.1	6.3	1.2	2.2	真書	遺体左側	66
18	皇宋通寶	北宋	1038	45.95	30.20	23.85	23.8	5.7	1.3	2.5	真書	首飾り、破損	102
19	皇宋通寶	北宋	1038	50.59	33.45	15.97	24.6	7.1	0.9	2.5	篆書	首飾り、一部欠	87
20	至和通寶	北宋	1054	40.52	47.62	11.86	24.8	6.3	1.0	2.5	真書	首飾り	86
21	嘉祐通寶	北宋	1056	32.81	48.11	19.08	25.5	6.9	1.3	2.9	真書	遺体左側	72
22	熙寧元寶	北宋	1068	36.10	36.49	27.42	23.8	5.3	1.3	4.0	篆書	遺体左側	69
23	元豐通寶	北宋	1078	41.54	47.04	11.43	24.0	6.1	1.3	2.9	行書	首飾り	91
24	元豐通寶	北宋	1078	29.53	51.65	18.82	23.7	6.7	1.2	3.0	篆書	首飾り	96
一	元豐通寶	北宋	1078	44.04	36.75	19.21	24.8	6.5	1.0	2.0	篆書	首飾り、破損、取拓せず	80
25	元祐通寶	北宋	1086	20.87	54.17	24.95	24.1	5.3	1.0	2.7	行書	遺体左側、星形孔	74
26	元祐通寶	北宋	1086	28.19	52.49	19.32	24.8	5.9	1.3	3.3	篆書	首飾り	83
27	元祐通寶	北宋	1086	37.93	33.73	28.35	23.8	6.3	1.3	3.7	篆書	首飾り	97
28	元符通寶	北宋	1098	27.80	53.13	19.07	—	—	1.2	2.3	行書	遺体左側、破損	68
一	元符通寶	北宋	1098	34.14	43.52	22.34	24.8	5.1	1.5	4.3	篆書	遺体左側、破損、取拓せず	71
29	大觀通寶	北宋	1107	36.52	42.04	21.44	25.4	6.3	1.6	3.7	真書	首飾り、一部欠	100
30	政和通寶	北宋	1111	47.15	44.87	7.97	24.7	5.6	1.3	3.4	篆書	首飾り	81
31	正隆元寶	金	1157	79.01	13.33	7.66	24.5	5.3	1.3	3.4	真書	首飾り	109
32	洪武通寶	明	1368	44.38	41.46	14.16	23.2	5.0	1.7	3.1	真書	首飾り	93
33	洪武通寶	明	1368	47.86	38.06	14.09	23.3	5.3	1.4	3.1	真書	首飾り	95
34	洪武通寶	明	1368	49.43	36.35	14.22	22.0	4.8	1.8	3.3	真書	首飾り、背右 “一錢”	108
35	永樂通寶	明	1408	41.44	34.60	23.96	24.9	5.2	1.5	2.7	真書	遺体左側	65
36	永樂通寶	明	1408	47.38	39.13	13.50	24.8	5.1	1.5	4.3	真書	遺体左側	70
37	永樂通寶	明	1408	40.45	39.72	19.82	24.1	5.6	1.1	2.2	真書	首飾り	75
38	永樂通寶	明	1408	50.77	34.28	14.95	25.4	5.1	1.3	3.6	真書	首飾り	77
39	永樂通寶	明	1408	41.23	43.27	15.50	25.0	5.2	1.5	3.5	真書	首飾り	78
40	永樂通寶	明	1408	49.29	38.91	11.80	24.3	5.5	1.2	1.6	真書	首飾り、一部欠	82
41	永樂通寶	明	1408	36.24	50.17	13.59	25.1	4.9	1.2	3.3	真書	首飾り	84
42	永樂通寶	明	1408	30.29	56.38	13.33	24.3	5.1	1.5	3.0	真書	首飾り	85
43	永樂通寶	明	1408	41.42	47.67	10.91	25.5	4.9	1.2	2.8	真書	首飾り	90
44	永樂通寶	明	1408	42.63	42.32	15.05	25.0	5.4	1.4	3.7	真書	首飾り	98
45	永樂通寶	明	1408	41.11	44.05	14.84	24.6	5.5	1.3	3.1	真書	首飾り	99
46	永樂通寶	明	1408	34.50	31.92	33.58	25.2	5.4	1.0	1.9	真書	首飾り	105
47	永樂通寶	明	1408	50.07	36.85	13.08	24.9	5.5	1.1	2.3	真書	首飾り	107
48	永樂通寶	明	1408	64.45	20.54	15.01	25.0	5.2	1.3	3.8	真書	首飾り	111
49	永樂通寶	明	1408	52.85	34.16	12.99	24.8	5.0	1.2	3.0	真書	首飾り	112
50	永樂通寶	明	1408	49.23	34.80	15.97	25.3	5.0	1.3	3.5	真書	首飾り	116
51	永樂通寶	明	1408	37.03	50.56	12.41	25.0	5.2	1.5	4.2	真書	首飾り	117

表 1. 幣舞遺跡43号墓出土銭貨の測定値

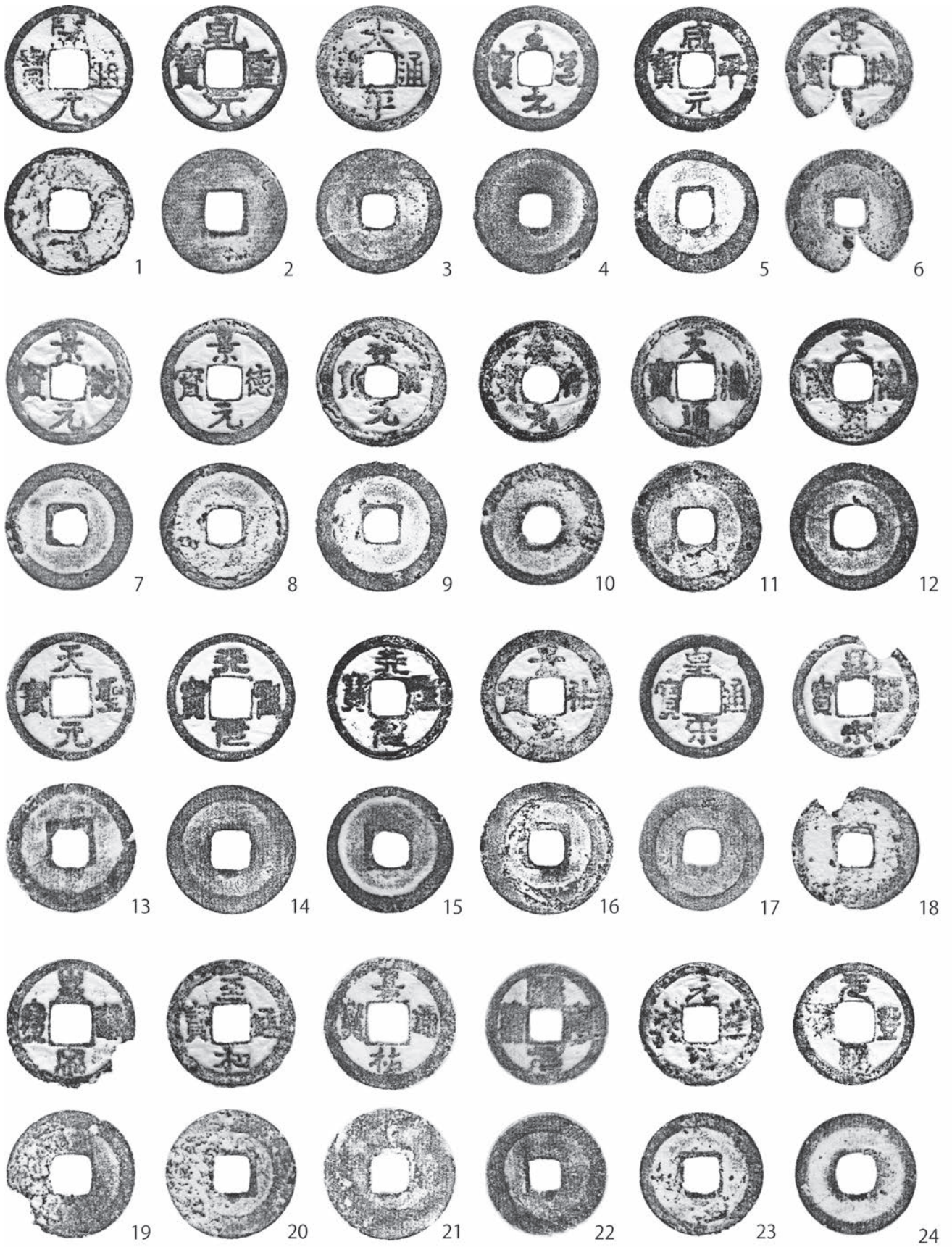


図1. 幣舞遺跡43号墓出土銭貨の拓本1 (S=1/1 No. は表1に対応)

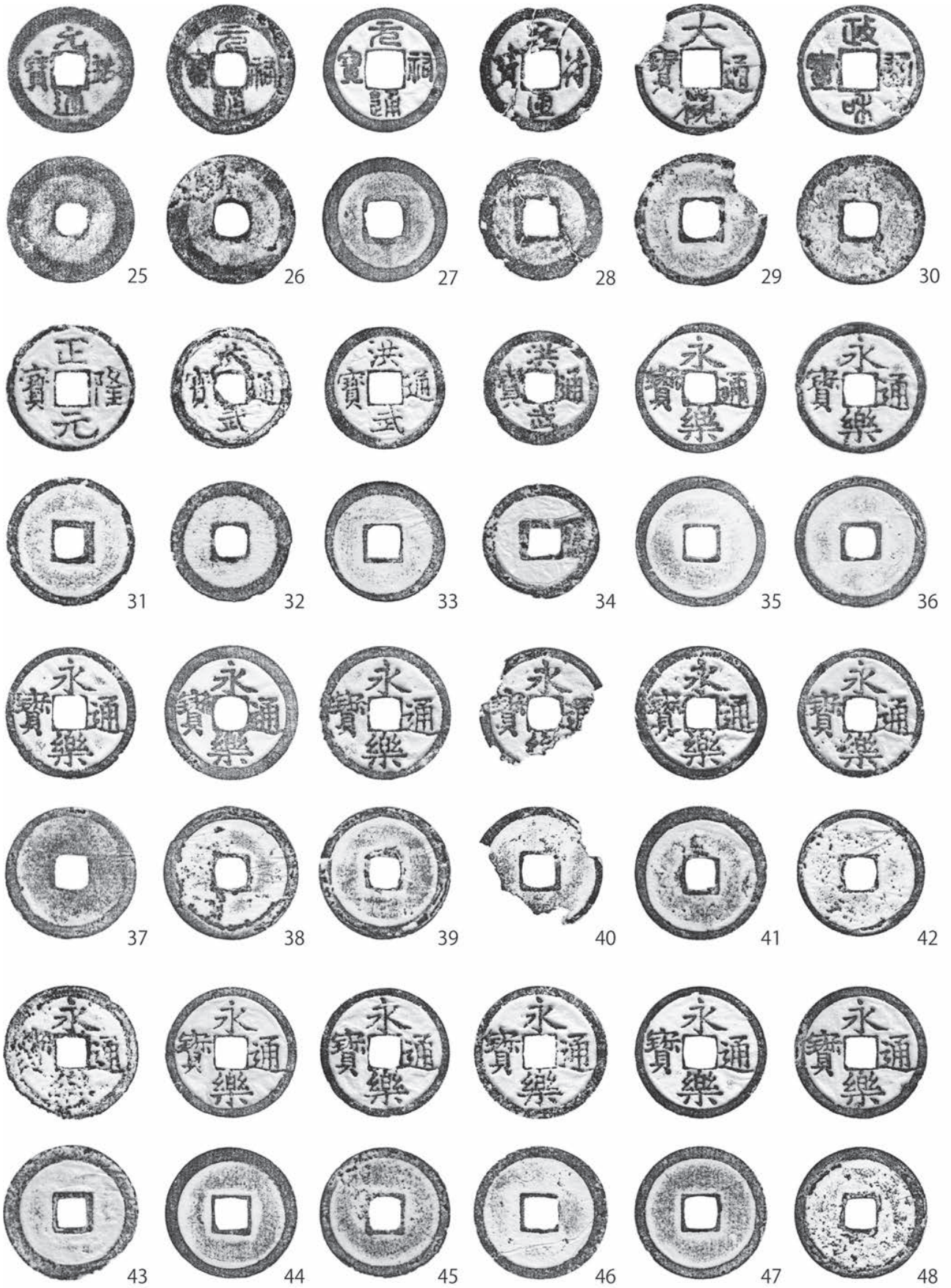


図2. 幣舞遺跡43号墓出土銭貨の拓本2

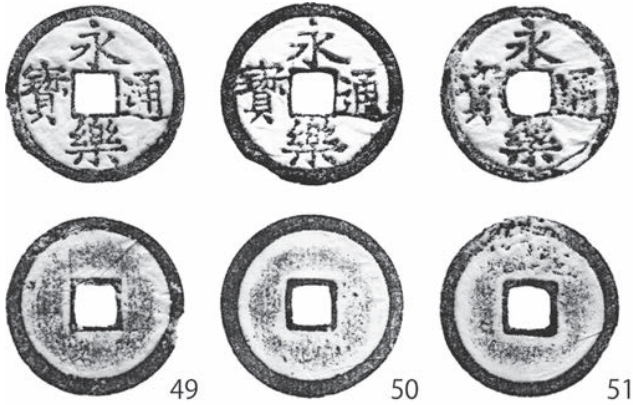


図3. 幣舞遺跡43号墓出土銭貨の拓本3

サハリンでは唐から明にかけての中国銭の出土例自体が非常に少なく、35枚しか確認されておらず、永樂通寶はその中で1例しか存在しない（三宅2013）。幣舞43号墓でこれだけ多くの永樂通寶が出土しているということは、これらの銭貨がサハリン経由でもたらされた可能性が低いことを示している。

一方、鈴木公雄氏の集成によれば、永樂通寶は全国で6番目に多い銭種であり、21万枚以上が確認されている（鈴木1999）。このことから、幣舞43号墓の銭貨は本州からもたらされた可能性が高い。

また、鈴木公雄氏によれば、永樂通寶は鈴木編年の6期以降に、九州と関東で出現率が高まる傾向があり、関東では6期12.5%、7期22%、8期37.2%と時期を追うごとに高まることが確認されている（鈴木1999）。鈴木氏の6期から8期は、16世紀に相当する（6期：16世紀第1, 2四半期、7期：第3四半期、6期：第4四半期）。幣舞43号墓の銭貨のもたらされた時期を検討する際の参考になろう。

この銭貨の直径は2.4cm台半ばから後半が多く、基本的に私鑄銭や模鑄銭ではなく制銭（本銭）と見て良いと思われる。しかし、銅の含有率が30~40%

台であり、一般的な制銭に比べ低い。例えば志海苔古銭では60~70%であり（市立函館博物館1973）、中国の北宋銭の成分分析でも62~68%と報告されている（戴・王2002）。

銅の含有率が低いなど制銭と異なる分析結果は、私鑄銭である可能性も考える必要がある。しかし後にのべるように、土中での保存状況により銭貨表面の状態が影響を受けた可能性もあろう。（三宅俊彦）

銭貨の成分分析

成分分析には、函館工業高等専門学校の携帯型蛍光X線分析計、Thermo-NITON（サーモ・ナイトン）を使用した。表面2点、裏面2点の計4点を測定し平均を算出した。各点の測定時間は、1分に設定した。

前章でものべたように、分析の結果は、函館市の志海苔古銭や知内町の涌元古銭の結果とは異なるものであった。永樂通寶を例にすると、北海道で出土した涌元古銭と賀張古銭に含まれる永樂通寶は、銅が55%~75%、鉛が15%~35%、錫が5~15%の範囲に集中する傾向が認められる（中村2013）。これに比べると、43号墓から出土した永樂通寶は銅の成分比が低く、30%以下の資料が散見される。

では、同じくガラス玉と共伴した例である根室市のコタンケシ遺跡（川上ほか1994）の出土銭貨と比較してみよう。同遺跡では1基の墓址に内耳鉄鍋（脚有・丸型湯口）、石製玉、漆器などとガラス玉、銭貨が副葬されていた。銭貨はいずれも中国銭貨で、計16枚に過ぎないが、最古銭が開元通寶、最新銭が永樂通寶という構成は幣舞遺跡43号墓と同じである。

コタンケシ遺跡の銭貨に比較すると幣舞遺跡の銭貨は、全体的に銅の成分比が低く、鉛の成分比が高い方向に分布が移動する傾向が認められる（越田ほか2014）。おそらくは、土中での保存状況から影響を受けた可能性があるのではないかと考えられる。

（中村和之）

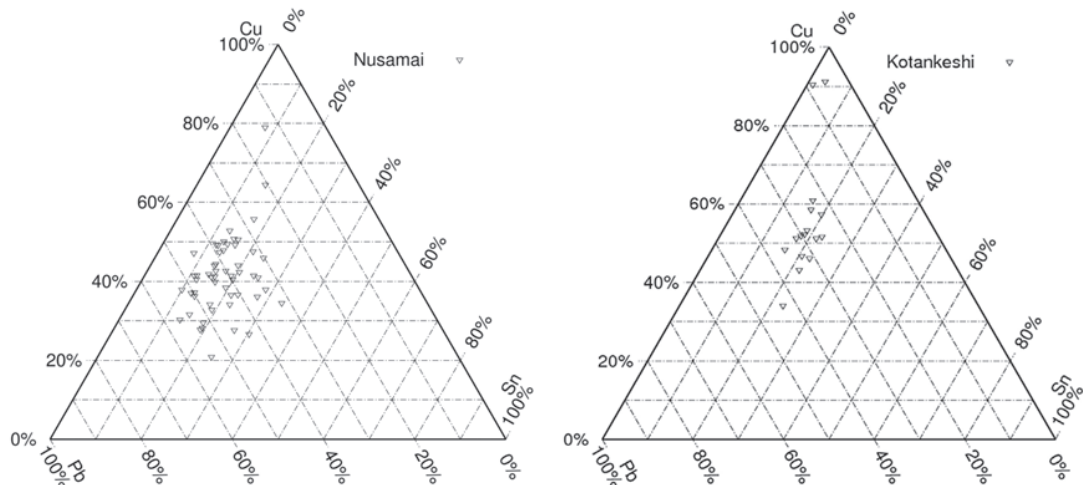


図4. 幣舞遺跡(左)とコタンケシ遺跡(右)出土銭貨の三角ダイヤグラム(銅・鉛・錫)

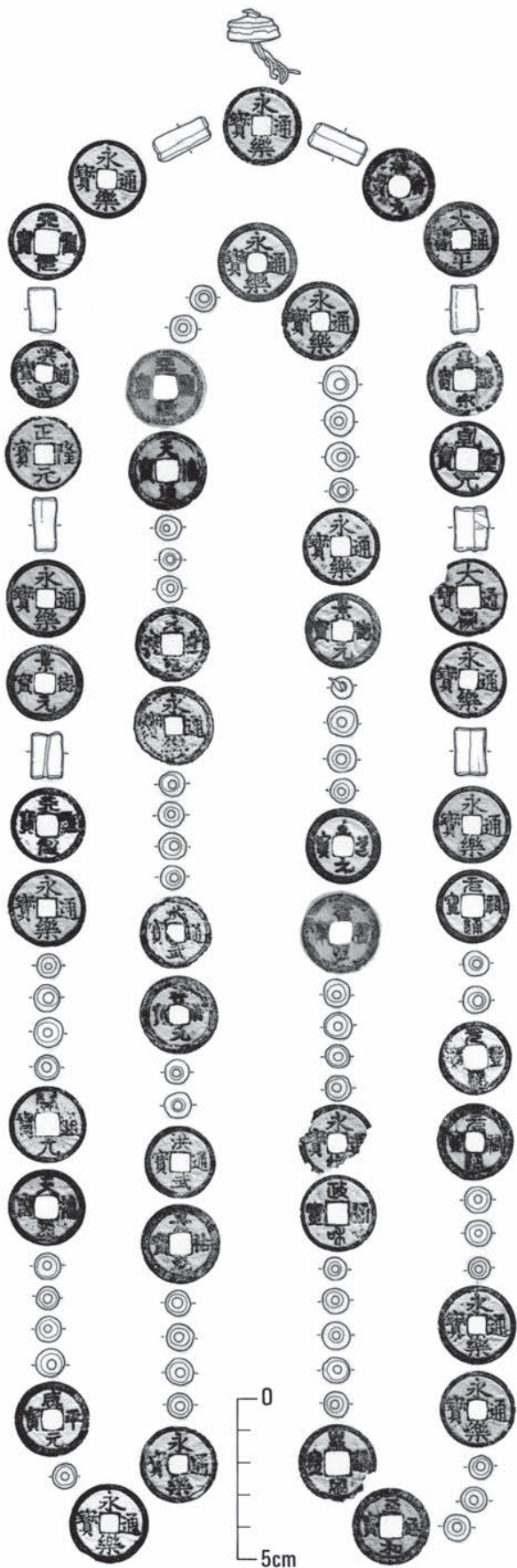


図5. 幣舞遺跡43号墓出土首飾り復元図

おわりに

43号墓から出土した銭貨は、成分分析においては北海道の出土銭貨の分析結果とは異なる傾向を示すことがわかった。

なお、土中での保存状況が銭貨表面の状態に影響を与えている可能性を指摘したが、より詳しい分析は今後の課題としたい。

謝辞

本稿では、銭貨の拓本・図版の作成を淑徳大学の竹内美里と越前谷孔暉が、成分分析を函館工業高等専門学校埋蔵文化財研究会の川上桐佳・加澤晴華・多田佳歩・欠端佑至がそれぞれ行った。記して感謝したい。

引用文献

石川朗. 1994. 釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅱ. 釧路市教育委員会, 釧路.

石川朗・越田賢一郎・竹内孝・中村和之. 2014. 北海道釧路市幣舞遺跡から出土したガラス玉の成分分析. 釧路市立博物館紀要, 35 : 21-26.

川上淳・本田克代. 1994. 根室市コタンケシ遺跡発掘調査報告書. 根室市教育委員会, 根室.

越田賢一郎・猪熊樹人・竹内孝・中村和之・三宅俊彦. 2014. 北海道根室市のコタンケシ遺跡から出土したガラス玉と銭貨の成分分析. 根室市歴史と自然の資料館紀要, 26 : 51-64.

市立函館博物館. 1973. 函館志海苔古銭. 市立函館博物館, 函館.

鈴木公雄. 1999. 出土銭貨の研究. 東京大学出版会, 東京.

高山博. 1999. 釧路市幣舞遺跡出土人骨(92~97年資料). 釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ, p109-132. 釧路市教育委員会, 釧路.

坪井正五郎. 1888. 本邦石器時代の遺物遺蹟は何者の手に成たか. 東京人類学雑誌, 3-(31) : 382-403.

坪井正五郎. 1893. 常陸風土記に所謂大人踐跡とは堅穴の事ならん. 東京人類学雑誌, 8-(88) : 400-402.

中村和之. 2013. 北海道から出土する永樂通寶とその特徴. 公開シンポジウム中近世北方交易と蝦夷地の内国化発表要旨集(関根達人編), p90-96. 弘前大学人文学部文化財論研究室, 弘前.

花岡正光. 1999. 釧路市幣舞遺跡のテフラについて. 釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ, p103-108. 釧路市教育委員会, 釧路.

三宅俊彦. 2013. サハリン出土の銭貨. 環オホーツク海地域における前近代交易網の発達と諸民族形成史の研究(北海道大学総合博物館研究報告第6号) : 66-85. 北海道大学総合博物館. 札幌.

戴志強・王体鴻. 2002. 北宋銅銭金属成分分析. 銭幣学与冶铸史論叢(周衛榮・戴志強). 中華書局, 北京.